

令和5年度第1回学校運営協議会報告  
(兼コンプライアンス委員会)

県立浜松特別支援学校

1 日時 令和5年6月7日(水) 午後1時30分から3時30分まで



2 参加者

(1) 委員

- 特定非営利活動法人 くらしえん・しごとえん 代表理事 鈴木 修
- 五島地区自治会連合会 会長 鈴木美佐男
- PTA会長 鈴木 奈美
- 国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 柘植 美文
- (株)日本マクドナルドフランチャイジー 株式会社フロム東海 代表取締役 山田 晴茂
- 西南障がい者相談支援センター センター長 後藤翔一朗

(2) 教職員

校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事  
中学部主事、高等部主事、教務課長、進路支援課長  
情報教育課長、防災課長、CS担当



3 次第

(1) 開会

ア 校長挨拶

6月2日の大雨では、幸い本校の被害はなかった。水害に関することについて、昨年度、学校運営協議会委員の浜松市危機管理課の小林様から多く学び、理解を深めた。さらに、危機管理マニュアルも見直しを行った。これらのことから、比較的落ち着いて対応することができた。小林様を始め、委員の皆さんには大変感謝している。学校運営協議会は今年で2年目、より一層力をいただき、学校を強くしていただきたい。

イ 自己紹介

ウ 委員の委嘱、会長・副会長の選出

校長より本日欠席の小林氏を含め、7人の方に委員の委嘱をした。  
会長：鈴木 修氏 副会長：鈴木美佐男氏 (規則の14条に基づく)  
CSコーディネーター：鈴木 修氏、鈴木美佐男氏

エ 趣旨説明 (説明：副校長)

学校運営協議会制度は学校と保護者・地域が協働で子どもの豊かな成長を支え、地域と共にある学校づくりを進めるための有効な仕組みである。本校でも昨年度から、学校運営について支援していただき

学校の応援隊として御意見をいただいたり、それぞれ取り組んでいただいたりしている。

オ 学校運営協議会年間計画（案）について（説明：CS担当）

年間3回実施し、学校運営（コンプライアンス委員会兼ねる）に関することと、「地域学習」「防災学習」「進路学習」のテーマ別協議を行う。→計画案について委員の了承を得た。

(2) 校内参観



(3) 学校経営計画、不祥事根絶取組計画の説明

ア グランドデザイン、学校経営計画について（説明：校長）

(ア) グランドデザインについて

\*昨年度末の学校運営協議会で学校経営計画について説明済みなのでポイントのみ\*

- ・学校経営で最も大切にしているのは、「その時期のやるべきことが明確化・焦点化された児童生徒が夢中になって取り組む“学校生活づくり”」である。
- ・目標具現化の四つの柱の中で「授業」について昨年度までは、主体的・対話的で深い学びの実現だったが、今年度は個別最適な学びと協働的な学びの実現に変更した。コロナ禍の感染症対策によるところが大きい。授業が小グループ化・個別化し、一斉授業の場面は減った。特支の基本は、望ましい個別対応を図りながら人との関わりの中で学びを深めていくことが大切である。そのような思いから、個別最適な学びと協働的な学び、これを両立する学校を目指す。

(イ) 学校経営計画について（説明：校長）

\*取組目標の重点から抜粋して説明\*

- ・＜授業＞成果目標：「児童生徒が夢中になれる学校生活づくり。時期ごと、取り組むべきことを明確化・焦点化した学校生活づくりを考えている。」職員にアンケートをとって明確化・焦点化した学校生活づくりに取り組んでいるかを評価する。評価の方法は従来の4件法から6件法を検討中である。
- ・＜安全＞成果目標：「安全・快適な環境をつくるために廃棄、片付け、清掃などに自ら取り組んでいる。」子どもたちの安全な学習環境を作るために、古いもの、壊れた物は廃棄しようということに昨年度から力を入れて取り組んでいる。本校のことを知る来校者からは、不要な物が減り、きれいになったという声をいただいている。継続して取り組む。
- ・＜協働＞成果目標：「教育活動に対して応援してくれる保護者・地域の関係機関・人が増えた。」学校運営協議会に直接関わることである。増えたと実感できることを目指す。
- ・＜チーム＞成果目標：「コロナ禍で変化した指導の在り方・働き方を今後どうあるべきかを視点に見直している。」コロナ禍で多くのことが変わった。マスクの着用を求めないというところまできている。今後どうあるべきか、これを視点に良い見直しを図る。

イ 不祥事根絶取組計画について（説明：副校長）

- ・教育公務員としての自覚と、不祥事根絶の取組を自分のこととして捉えることを重点として計画した。県の報告では4月から県内では懲戒処分が4件あり、危機感を持っている。
- ・本校の不祥事根絶の取り組みの特色は、学年会を活用し、テーマを設定したグループワークを年間4

回行うことである。不祥事根絶のことを自分のこととして捉えるには、小グループによる話し合いが有効であると言われている。

- ・6、7月は不祥事根絶推進月間である。今年度の県の重点の中の交通事犯、事故の削減については、校内で交通安全標語を募集し掲示したり、交通事故が起きなかった日をカウンターで示したりして取り組んでいる。
- ・教職員の生徒指導に関わる共通ルールを定めている。これらのルールについて職員会議等で周知を図る。SNSを通じて生徒とつながることから不祥事が起こることがあるため、連絡手段などについて決めている。

## ウ 質疑

- ・コンプライアンス関係について、定期的に教育セミナーのようなものを実施して指導しているのか。  
(山田晴茂氏)

→定期的に県からコンプライアンス通信や事例集があり、それを使って研修を進めている。(副校長)

- ・通達だと伝わりきれないことがあるようにも感じる。マクドナルドではeラーニングで質問に答える形式で取り組んでいる。全問正解しないと次へ進めないというもので、定期的に受けることになっている。シンプルで取り組やすいと感じている。その中でポイントなのは、不祥事を見た人がとるべき行動を理解しているかである。(山田晴茂氏)

→県でもチェックシートの類はあるが、eラーニングのように正答しないと次に進めないというようなものはないので、参考にしたい。(副校長)

- ・現在の給食や行事はどのように取り組んでいるのか。(柘植美文氏)

→小学部：

給食 コロナ前の食堂に集まることはせず、各教室で食べている。向かい合って食べるクラスもある。

運動会 通常どおりに戻す。

生活単元学習 小グループから学年全体で行うようになっている。(小学部主事)

→中学部：

給食 運搬は教員が行っていたが、生徒が行うようになった。配膳も今後、教員から生徒に移行する。

運動会 保護者の参観ありで実施する。

学習 一グループの人数は増やし、大きな縦割り集団で学習している。(中学部主事)

→高等部：

給食 運搬は授業時間確保のため、コロナ前には戻さずにワゴンの運搬を教員等が行っている。

体育交流会 目的を絆を深める、仲間づくりとして行った。

対面式 オンラインから2学年ずつ集まって行うように変更した。

学年集会 オンラインから一同に会す。(高等部主事)

→コロナ禍の3年間で学んだことや良さもあった。だから、コロナ前に全て戻すということではなく、コロナ禍で良かったことも残しつつベストミックスを探っていくとよい。(柘植美文氏)

- ・高等部の生徒について、浜松みをつくし特支ができて生徒数は変わったか。(鈴木修氏)

→170人から119人と減ってきているが、学年ごとに増減もあり、一概には言えない。そして、市内の発達支援学級は増えている現状である。(高等部主事)

→学校が増えれば解決する問題ではないのだろう。先生方の負担は減っていないと感じる。(鈴木修氏)

- ・学びの場の変更の現状は？特別支援学校から小中学校へ就学先を変更するということはあるか。

(柘植美文氏)

→例えば、聴覚特支のような補聴器が適切に使用できるようになれば等ではあるだろうが、知的特支ではあまりない。(校長)

・いろいろな学校を訪問するが、参観して特別支援学校の子どもたちは落ち着いていると感じた。

(鈴木美佐男氏)

→学習が子どもにあっていれば、落ち着いて取り組めるということはあるかなと思うと、そのように感じていただけたとしたら嬉しい。(校長)

・ソーシャルインクルージョンの捉え方によっては、特別支援学校の存在意義が問われるようにも感じるが、特別支援学校で適切に教育を受けることが大事だと逆に思うようになってきている。協議会のあり方とも関連するが、特別支援学校がどのように地域の中に広がっていくかということが大切であり、それを考えていくことがインクルージョンだと思う。(鈴木修氏)

→一時そのような指摘はあったが、文科省から見解が出ているので、特別支援学校がなくなるということではない。(校長)

・授業のことについて、上の学年の子が下学年の子に教えるなど縦割りの活動はどの程度行っているのか。(鈴木奈美氏)

→高等部では、縦割り活動である委員会活動に力を入れている。また、作業学習も縦割りで行っていて先輩が後輩に教えるなどの学び合いを大切にしている。(高等部主事)

→中学部では、1年から3年まで縦割りで学習する作業学習、体育や、1年生を迎える会は2、3年合同で企画運営していくなどの機会を持っている。(中学部主事)

→小学部では、運動会があるので高学年が低学年に教えたり、応援し合う場を設けたりしたい。

(小学部主事)

→学部の枠を超えて一緒に活動することはないか。(鈴木奈美氏)

→コロナ前は生徒会主催でリクレーション活動を行っていたが、今は高等部生徒会があいさつ運動に取り組んでいる。(高等部主事)

→ある小学校では集団登校をやめたという話も聞くが、低学年の子の面倒を見る経験等、集団登校の良さがある。浜特は小中高等部と揃っているので、生かすとよい。(鈴木美佐男氏)

・下校の様子を見学してみて、確かに放課後デイサービスの車列はすごかった。ここ10年で放課後デイサービスが増えたと聞いている。相談の現場でも増えている。多様な選択肢ができたという良さがある反面、放デイの認識そのものが多様化している。特別支援学校や発達支援学級の基本的な理解なく単に希望だけで選択すると、子供が苦しい環境で過ごすことになってしまう。そのようなことがないよう相談の現場で適切に伝えていきたい。(後藤翔一朗氏)



#### (4) テーマ協議 (全体進行：鈴木修氏)

##### ア 令和5年度の成果目標及び活動内容について

##### (ア) テーマ「地域学習・防災学習」

成果目標：地域の人（保護者含む）と関わる機会を各学部2回以上増やす。

防災に関する生徒への講座を1回以上行う。

・学校経営計画の学校応援体制の構築の目標を踏まえ、成果目標を設定した。コロナ禍からの新しい生活が始まっているので、地域の良さを実感できる機会を多く持ちたい。(CS担当)

- ・防災学習については、防災に関する生徒への講座とした。講座ということだけでなく、例えば、避難訓練と一緒に参加してもらい意見をいただくということでもよい。(防災課長)
- ・小学部：応援いただきたいこと  
地域探検で挨拶を交わすこと、彩ファームの交流。保護者へは、花壇の草刈りや給食の運搬、行事のスタッフとしてのお手伝いなど。(小学部主事)
- ・中学部：応援いただきたいこと  
地域の方と一緒に清掃活動、作業学習のお手伝い、作品展示の場など。(CS担当)
- ・高等部：応援いただきたいこと  
五島協働センターの清掃活動、販売会を宣伝する場の情報提供、委託作業を提供してくれる所など。  
(高等部主事)

→人的支援についてはPTAでお願いしたい。地域に伝えていることは、学校は地域とつながりたがっている、地域に出たがっているということである。高等部の畑を耕してくれた地域の方がいたという報告を受けたが、そのことを回覧で地域に発信している。そこから少しずつ広がっていくのではないかと期待している。(鈴木美佐男氏)

→新たに始まった花の会との交流活動は継続するとよい。活動の様子を五島協働センターの広報誌に掲載することで、他のサークルに自然に広がることを期待している。販売会の宣伝の場や発表の場、作品やポスターを展示する場など要望があれば依頼する。(鈴木美佐男氏)

→防災については、高校に防災の研究会がある。小学校で発表した実績がある。(鈴木美佐男氏)

→江南中学からの依頼で、カワラハンミョウ(絶滅危惧種)という希少な昆虫が生息していることを教えた。自然を知り守る学習も生かすことができるのではないかと。(鈴木美佐男氏)

→地域の清掃活動は休日なので難しい。近隣の「ほっと」が奉仕活動を行っている。一緒に行うのはどうか。地域の祭りやマラソン大会が行われている。また、アナウンスする。(鈴木美佐男氏)

→PTAとして応援できることは、駐車場係や草取り。展示も病院などにも呼びかけてもよい。自分の子どもの生活を振り返ると、移動支援を行う大学生ボランティアがいる。大学に声を掛けてみるのもよいのではないかと。(鈴木奈美氏)

→藻を仕分ける作業を浜北特支や城北分校へ委託している業者がある。どのような作業が可能なのか、情報をいただいてマッチングできるとよい。(鈴木奈美氏)

- ・参観日の駐車場などのボランティアでお手伝いについて、以前勤務していた大学では、小学校から年間一括して依頼されていた。学生も出向いて学びたいという気持ちがあるので活用するとよい。  
(柘植美文氏)

#### (イ) テーマ「進路学習」

成果目標：学校見学会への新規参加企業を10箇所以上増やす。

進路に関する学習支援を1回以上行う。

- ・参加企業の人数について、令和元年度は西遠地区就業促進協議会の事業として実施しているので学校単独ではないが、本校へ41人が参加した。令和4年度は就業促進協議会で投げ掛け、期日、回数は各校で設定した。33人参加した。見学可能日を複数設けていたことで、参加者からはいろいろな学校へ参加できたと好評だった。見学会の案内は市内119社、依頼のあった企業へメール配信している。(進路支援課長)
- ・進路に関する学習支援では、生徒への学習支援だけでなく、保護者や教員を対象としてもよい。高

等部の課題は、高等部の未経験の教員も多く、相談に必要な進路の基本的な知識を深めていくことが必要である。(進路支援課長)

・発達支援級から高等部へ入学してくる生徒の保護者に対して、福祉サービスに関する学習機会が少ない。保護者にいかに情報提供するかも課題である。また、進路希望の変化が見られる。企業、A型の希望者が5年前と比較すると15%減、一方、就労継続B型5%増である。未定者も増えている。これらをどのように捉え、必要な支援を検討したい。(進路支援課長)

・中学部も高等部経験の少ない教員が多い。中1から進路に関することを保護者に対して話題にしたいが、教員に基礎的な知識が不十分であると感じる。(中学部主事)

・進路希望調査について未定が17.7%とあるが未定とは何か。(鈴木修氏)

→どこを希望するか分からないということである。そのようなケースが増えている。(進路支援課長)

→コロナによって企業訪問や実習が減っているように感じる。(山田晴茂氏)

・昨年度の目標だった実習先を開拓するということは進んだか。(山田晴茂氏)

→増やすことは難しかった。それにつながるという意味で学校見学会の参加者を増やしたいと考えた。(進路支援課長)

・見学会の案内配付が119社は少ない。浜松市の障害福祉課へ依頼すれば、A型、B型、移行などへメール配信できるのではないか。それに加えて、私と関わったことがある企業は百何十社ある。さらに浜松市の産業部のところでかなり持っている。学校見学会のアナウンスは協力できる。

(鈴木修氏)

・職員研修については、別紙の事業(浜松市企業伴走型障害者雇用推進事業)を活用すれば謝金は不要である。また、研修の内容については、働いている方々の動画を資料として持っているので活用できる。(鈴木修氏)

・案内のメールを受け取っても企業では、優先順位をつけて対応することが多い。優先順位が上がるような仕掛けがあると参加者を増やせる。例えば、案内を出すときに、「今後、法定雇用率はどんどん上がっていきます。」といった内容を添えて、優先順位が高い内容であることをアピールすることが有効である。(山田晴茂氏)

・就労先の企業が増えれば子どもの選択肢が増える。(鈴木修氏)

・見学会は修さんに情報を流す。企業が優先順位を上げて参加について検討してもらえる情報を混ぜて流す。(進路支援課長)

・生徒向けの学習支援について、企業に採用して15年経つと通常だと仕事を増やしてくのだが、障害の状態によっては、なかなか広がらないのが現状である。これではモチベーションが下がる。このような機会は本人のモチベーションを高めることにつながるので期待している。(山田晴茂氏)

・高等部3年生対象で9月くらいに行えるとよい。時期等、改めて相談する。(進路支援課長)

・福祉のことについて、昨年、教員向けに行ったが保護者向けでもできる。ざっくり制度の説明をしてもなかなか難しい。例えば西区や南区などの事業所に行くか呼び掛けて動画などの資料を交えて説明してもらえると、より実感をもって理解してもらえる。(後藤翔一朗氏)

・他の連絡協議会で行っていた例として、支援機関の各専門家のオンライン会議をYouTubeにアップしたことで多くの方が関心を持った。このような仕掛けを考えてもみるのもよい。(鈴木修氏)

・教員向けの研修会は、夏休みの実施を考えている。今後、具体化して連絡する。(進路支援課長)

・実習の前後など、1回話すではなく継続して研修の機会が持てるとよい。(鈴木修氏)

(ウ) 情報共有

「地域学習・防災学習」の協議の報告（柘植美文氏）

「進路学習」の協議の報告（後藤翔一朗氏）

(エ) 総評（鈴木 修氏）

今年度は、意見ではなく形を具体的に作っていくのが年。先生方は、頼むことが下手であると感じる。合理的配慮の提供同様、本人からの申し出がない限りテーブルの上に乗らない。同様に、どんどん学校からの要望をテーブルに乗せてほしい。

(5) 閉会

ア 校長挨拶

30年前ニュージーランドへ視察をしたときのこと、現在の学校運営協議会のようなものに参加した。その頃日本には、学校評議員会も学校運営協議会もなかった。その会合では、校長や職員は、地域に対して弱音を吐いていたのが印象的だった。そして、学校の弱みを地域の方々が代わりに担ってくれたり解決してくれたりしていた。鈴木修様が言っていた「先生方は、頼むことが下手ですね。」につながるが、学校はもっと声をあげていくことが必要だと感じる。困っていることや弱音をどんどん吐いていきたい。今後もよろしくお願ひしたい。

第2回 学校運営協議会

開催日時 令和5年10月13日（金）10:00～12:00